

# アドラー心理学における幼児期のライフスタイル形成

古 庄 高

## The Formation of a Style of Life in Childhood

FURUSHO Takashi

### Abstract

When we explore the development of the mental life of a child, we do not overlook the significance of objective conditions in providing possibilities and limits. Both heredity and environment influence the formation of psychic prototype of the personality. A. Adler pointed out the importance of organ inferiority which results from heredity. He emphasized the importance of birth order as one of environmental factors, too. But he found it necessary to assume the existence of another factor, the "creative power" of the individual, which enables him to seek his goal as he judges best. The creative power casts into movement all the objective conditions, a movement toward the goal which he creates in response to his environment. Every individual is regarded as a goal-directed and purposeful whole. His fictional goal is the unifying principle of personality. Thus Adler combined the holistic concept with the teleological approach, as R. Dreikurs indicated.

The consistent movement toward the goal was called a style of life by Adler, which has been variously equated with the self, a man's own personality, individuality, individual form of creative activity, the whole attitude to life and others. The style of life is developed in earliest childhood and is not changed so long as the individual does not fully realize the discrepancies regarding the demands of social problems. A child, being weak, feels inferior and strives to develop along a line of direction fixed by the goal which he chooses for himself. Then it is very important that the child seeks for his superiority in increasingly useful ways. Only when the striving for superiority of the child is united with social interest, his inferiority will be compensated in any socially useful way. The purpose of education is, therefore, to increase the social interest of the child.

**キーワード：**アドラー心理学、ライフスタイルの形成、創造的なちから、優越性の追究、共同体感覚

**Key words:** individual psychology, formation of the style of life, creative power, striving for superiority, social interest

---

本学文学部総合文化学科教授

連絡先：古庄 高 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科  
furusho@mail.kobe-c.ac.jp

## はじめに

本論の目的は、アドラー心理学の見解に基づいて、幼児期のパーソナリティの発達およびパーソナリティの構造について考察することである。拙論「アドラー心理学による幼児のしつけ」においては、主として幼児を養育する親や教師の立場から〈しつけ〉の問題を論じたが、本論では幼児自身のダイナミックな精神の動きに焦点を当て、幼児のパーソナリティが形成される過程に検討を加える。そこからさらに、教育の原理や方法の基礎となる人間理解へと考察範囲を広げて、論じることにしたい。アドラーの用いるライフスタイル (the style of life 生のスタイル) の概念は、しばしばパーソナリティや性格と同じような意味に用いられることもあり、あいまいな概念だとも言えよう。しかしアドラーは、もともと「人間の生は、みずからを運動のなかに表現する<sup>1)</sup>」と捉えているので、絶えず〈動き〉のなかにある人間の生のあり方をひとつの概念で表すことに無理があるのはやむをえない。その生の動きのなかに、ひとつのスタイル、法則、線のようなものが現れてくるのが幼児期だと考えられている。幼児期の精神発達の理解は、子どもの教育のあり方と緊密に結びつくものである。

高度な産業文明に育つ現代の子どもたちの生活環境は、物質的には豊かではあっても、彼らの精神発達の観点からすると、決して恵まれているとは思われない。人や自然やモノとの直接的な交わり、感覚や運動器官を用いる身体的な活動、仲間との遊びなどが減少したことにより、体や心を使って他者の心や現実世界を感受するちから、自分で考え、理解し、意図をもって周りに働きかけるちからが育ちにくいからである。とくに乳幼児期の精神発達は、身体的な活動および直接的な対人関係と切り離すことができないので、深刻な事態にあると言えるだろう。健全なライフスタイルを形成するために、周りの人やモノとの直接的な相互交渉は不可欠な条件である。そのことについて詳しく論じていこう。

### 1 創造的なちから

子どものパーソナリティの形成について考察するにあたり、まず人間の〈創造的なちから creative power〉について述べる必要があるだろう<sup>2)</sup>。アドラー心理学によるパーソナリティ論の最大の特徴は、遺伝や環境や社会に基づく決定論の考え方をとらない点にある。もちろん遺伝的素質や環境条件や社会の仕組みが、パーソナリティ形成に無関係というわけではない。遺伝的素質は人によって違いがあり、それが人に可能性と限界を与えることは確かだろう。例えば、もし身体や知性に関連してなんらかの遺伝的な長所や欠点があるならば、それはその人のパーソナリティ形成に少なからぬ影響を及ぼすにちがいない。アドラー自身、遺伝的な器官劣等性をもつ子どもの発達について数多く研究し、生活に困難をもたらすような身体障害のある子どもたちが、あらゆる経験を自分の障害と関連づけながら発達することを示している。例えば、胃に障害のある子どもは、食べることに強い関心をもちやすく、視力に障害のある子どもは、見えるものに強い関心をもつ傾向があるというのである<sup>3)</sup>。そのような子どもたちは、

障害のもたらず困難な状況に直面することが多いので、誇張されたかたちで劣等感をもつことが少なくない。また遺伝による影響は、このような器官劣等性に限られているわけではない。障害とは反対に、生得的な人並みはずれた能力や才能や性格特性なども、同様にパーソナリティに大きな影響を与えらると思われる。遺伝的に優れた知性は、みずから自発的にある特定の事柄に強い好奇心を示し、それを好きなこと、得意なことにしていく。そうした子どもが少なからず存在することは、よく知られている。しかし卓越した業績を生み出すかもしれない芸術分野や数学などの才能も、もし教育や訓練の機会がまったく存在しない状況下で育つと、それほど目立つことのないまま、見過ごされてしまうだろう。パーソナリティの発達を最終的に決定するのは、もって生まれた素質ではなく、それをどう使うかなのである。アドラーは彼の力動的な心理学を〈使用の心理学 psychology of use〉と呼んで、〈所有の心理学 psychology of possession〉との違いを強調している<sup>4)</sup>。

子どもを取りまく環境や社会の仕組みが与える影響についても、同じように考えられる。とくに幼児期の家庭環境、すなわち家族の価値観や雰囲気、父親と母親の関係や親子関係のあり方などは、子どもの発達に重大な影響を与えずにはおかない。さらに現代の文化や社会のあり方は、人間と自然やモノとの関係、および他者との関係に根本的な変化をもたらし、子どもの社会的知性や感情的知性の発達に深刻な問題を生み出している。パーソナリティの形成におよぼす育児の仕方や教育の方法の影響力の大きさについては、今さら言うまでもない。

しかしそれでもアドラーは、遺伝もしくは環境に基づいて、あるいは遺伝と環境の相互作用によって、子どもの行動やパーソナリティの発達を説明しようとしなない。彼はさらに別のもの、すなわち〈創造的なちから〉の存在を仮定する。〈創造的なちから〉とは、「子どもに及ぼされるすべての影響、子どもの有するすべての可能性を、ひとつの運動のかたちに、つまり障害の克服に向けての運動のかたちにしていちから<sup>5)</sup>」である。要するにアドラーにとって、子どもは遺伝や環境によってある程度まで決定されてはいるけれども、自分で能動的に判断をくだし、行動し、状況のみずから創造する能力をもっているのだ。遺伝や環境に対する子どもの反応は、単なる受け身の反応ではなく、子どもの創造的な活動の現われなのである。それゆえ、〈遺伝や環境として子どもに何が与えられているか〉ということよりも、〈与えられたものをどう使うか〉という姿勢、いわば人生に対する態度の方が大事だと言える。適切な教育やしつけの仕方が非常に重要になるのも、この創造的潜在力を発展させるためである。アドラーは「個人心理学という科学は、生の神秘的な創造力を理解しようとする努力から発達した<sup>6)</sup>」と述べて、遺伝や環境に由来する限界はあるものの、自分で目標を設定し、目標に向けて自由に選択し、自発的に動こうとする人間の創造性を強調している。この創造的なちからこそ、その人が自ら設定した目標を追求することを可能にしているのである。人間を未来に向かって前進させるこの創造的なちからは、アドラー心理学の目的論の基礎にもなっている<sup>7)</sup>。目的論の立場をとるアドラー心理学では、人間を過去の出来事や経験に支配された存在と見るのではなく、〈目標を追求する存在〉と考える。〈その人がどこへ行こうとしているのか〉〈何を欲しているのか〉〈何を目標にしているのか〉について問うとき、人間はもっともよく理解できるのだ。

## 2 全体論（ホーリズム）と目的論

創造的に反応する個人のちから（生の創造力）は、心と体の働きのすべてを動員して目標を追求・達成しようとする個人の動きのなかに表れている。心と体は同じ生命の表現であり、両者はともに生命という全体の部分である。人はだれでも現在の不快や苦痛や困難を克服しようと努力し、安全や適応を求めて活動する。個々のふるまいや表現は、決してそれ自体で完結したもの、あるいはそれぞれが独立した単位なのではなく、目標という共通の一点に向けられている。それらはすべて統一性を有する首尾一貫した活動である。あらゆる行動や表現が〈パーソナリティの統一性 unity of personality〉によって動機づけられ、それに応じて方向が決定されているのだ<sup>8)</sup>。つまり個人（individual）はひとつの統一されたパーソナリティであり、分割できない（indivisible）存在である<sup>9)</sup>。アドラーは〈個人の内にあるこの向目的的に首尾一貫した態度や動き〉を重要視して、〈生の線〉〈行動の線〉〈ガイドライン〉〈ライフプラン〉などの用語を用いていたが<sup>10)</sup>、後期の著作では〈個人のライフスタイル the style of life of the individual〉という表現になっている。ライフスタイルは言い換えれば〈個人の思考や感情や行為、いわゆる意識や無意識、あるいは、あらゆる個人のパーソナリティの表れのなかに見られる首尾一貫した統一性〉のことであり、個人のこの統一性を明らかにすることが、アドラー心理学の主要な課題とされている<sup>11)</sup>。

アドラー心理学の基本的な前提のひとつが全体論（ホーリズム）であるが、このようにアドラーの全体論は、人間の目的志向性とセットになっていることに注意しなければならない<sup>12)</sup>。目標はライフスタイルを決定し、行動のあらゆる面に反映されている。アドラー理論における全体論と目的論の結合を指摘して、ドライカースは次のように述べている。「個人は、彼自身が設定した目標に向かって動いていく。個人は、その目標によって理解されることができる。目標に向けての全体の運動のなかに、個人の全体が表現されている<sup>13)</sup>」と。全体論と目的論との結びつきを念頭に置けば、「あらゆる個人は、パーソナリティの統一性と、その統一性をそれぞれの仕方で形づくる作用の両方を表している。それゆえ個人とは、絵であると同時に画家でもある。彼は自分自身のパーソナリティの画家なのである<sup>14)</sup>」というアドラーの言葉がよく理解されるだろう。子どもは自分で自分を作りあげるものなのであり、大人ともなれば自分のパーソナリティに対して責任を負わなければならないのだ<sup>15)</sup>。そしてまた、たとえある人の内部で意図や願望に矛盾や葛藤がある場合でも、一見矛盾しているように見えるすべてのものの根底に、首尾一貫した向目的的に統一されたパーソナリティが存在するのである<sup>16)</sup>。

矛盾し対立する気持ちや意向が生じる場合について、ドライカースがよい例をあげている。プールの飛び込み台から飛び込もうとして何度かためらい、中止しかけた後に、やっと飛び込んだ人がいた<sup>17)</sup>。その人の心は、飛び込もうとする気持ちと、それを怖がる気持ちに分裂していたように思える。しかしドライカースによれば、その2つの動機の対立は見かけだけである。その人はまず飛び込むことへの恐怖心をつくり、次にそれを克服することで、自分の意志の強さを示すことができた。このように最終目標と関連させ、すべてを全体の動きとして見れば、それはひとつの目的的な行動なのであり、彼の人生の運動を表しているのだ。自分に打ち勝つ

克己心の強さを示すその人の行動は、このプールの時だけでなく、他の人生の場面においても見られるであろう。そうやって何度も克己心の強さを示しておけば、彼はたとえ何かをすることができなかつた場合にも弁解をしやすいし、他方克己心に欠ける人、自己コントロールのできない人を見下すこともできる。

こうして個人のすべての行動、その人の考えや空想や夢、あらゆる感情は、つじつまの合うひとつの運動であり、統一された方向に動いている。たとえ個々の意向や行動が矛盾するように見えても、全体としては、その人のライフスタイルを表現していると言える。もし行動を選択するに当たり、矛盾するふたつの意向の間で悩んでいるとすれば、その人は社会的に有益な方向、社会の規範やルールに則った目標に向かって、素直に前進することができないからである。社会が求める健全な行動について頭ではわかっているけれども、それとは異なることを思っているときや、それとは反対の利己的な利益追求の動機に従うときに、心のなかで葛藤が生じるのだ。そのような場合は、〈自分はよい意図をもっているけれども、そのよい意図を実行に移すことはできない〉という正当な理由を、あれこれ探さなければならない。それが葛藤であり矛盾なのだ。

感情についても同じことが言えよう。人が行動を起こすときには、感情が必要だ。その人の考えや意志を強化し、行動へと促すのが感情である。人生の諸問題に対する独自の構えや態度、すなわちライフスタイルを有する個人は、感情が高まることで行動に踏み出すことができる。このとき〈いろいろな感情とライフスタイルの間にはいかなる矛盾もない〉というのが、アドラー心理学が明らかにしたことである。「目標があるところでは、諸感情は常にその目標の達成に向けて自らを適応させる<sup>18)</sup>」ので、不安や怒りや悲しみや快活さなどの諸感情は、その人の目標達成のために〈必要な方向に〉〈必要とされる強度で〉生じるというのである。要するに、感情は心のうちから不随意的に湧き出し、我々は自分の感情に振り回されているように見えるけれども、実は我々が必要に応じて感情を発生させ、感情を利用しているのだ。

状況を受けとめる（認知の）仕方、認知された状況に対して抱く思考や感情、与えられた状況に対する創造的な答えとしての行動など、本質的に活動的な有機体としての人間の生のあらゆる動きには、特有なライフスタイルの刻印が押されており、すべての動きが個人のパーソナリティのもとに統一されている。

パーソナリティの統一性は、同時に、個人のユニークさをも表している。なぜなら、目標に向けての一貫した動きや態度、困難を克服する仕方、精神生活における運動の法則などに表現される個人のライフスタイルは、その人の固有の目標、考え方、感じ方、行動の仕方などから構成されており、それらが個人のパーソナリティ全体を特徴づけ、その独自性を生み出すからである。言い換えればパーソナリティの統一性やそれに特有なライフスタイルが、客観的な事実や状況そのものではなく、事実や状況についての私的で主観的な認知（統覚の図式）や判断、それに基づく個人の行動や活動によって形づくられるからである。個人の判断や解釈は、その人の独自の視点からなされるものであり、その視点がどの方向に向かうかを決定する。同じ現実生きているすべての人が、それぞれ異なった仕方人生の目標やライフスタイルをもつのは、このためである<sup>19)</sup>。個人の視点がその人の態度や目標の設定に影響を与え、行動を規制し、

パーソナリティを形づくる。それゆえ、2人の人がまったく同じライフスタイルをもつことはありえない。あらゆる人間は、それぞれ固有のライフスタイルをもつことになる。だがしかし、ライフスタイルがそれ自体としてはっきりと浮き彫りになり、鮮明になるのは、人がまったく未知の状況、あるいは危機的な状況に陥った場合である。体験したことのないような新しい状況、あるいは危機的な状況に直面して、その人の従来のライフスタイルではうまく対応することができないとき、あらためてライフスタイルのあり方が問われることになるからだ。好都合な状況や慣れ親しんだ生活のなかでは、ライフスタイルは状況や生活のなかに溶け込み、それらと一体になっているので、ライフスタイル自体が表面化することはあまりないのである<sup>20)</sup>。

### 3 初期のライフスタイル（原型）の形成

では、個人のユニークな運動の統一性としてのライフスタイルはどのようにして形成されるのだろうか。アドラー心理学では、通常4歳から5歳ごろまでにライフスタイルが決定されると考えられている。すなわち子ども時代の最初の4、5年の間に、認知や思考や行動のスタイルがある程度明確化し、精神発達の全体の方向はその後の人生でそれほど変化しないとされている。それというのも、乳幼児期の外界の諸印象は、子どもをすでに一定の方向に向けさせ、周りの状況がもたらす諸問題に対して一定の仕方ですべて答えるように促すからである。

諸問題に対する子どもの答えは、単なる機械的・反射的な反応にとどまるものではない。たとえ幼稚な仕方ではあっても、子どもは自分が発達の可能性として持って生まれたすべての遺伝的な素質と能力を用いながら、環境から受け取る印象に対して試行錯誤しつつ創造的に答えて、周りの世界に適応しようとするだろう。その応答の方向は、子どもの人生を通じて支配的であり続ける彼の目標に一致するものである。その結果、環境に対する応答の過程において、子どもには自分なりの外界の認知の仕方や問題に取り組むスタイル、さらにはひとつのまとまった目標がおのずと出現し、それが維持され徐々に結晶化する。環境からのさまざまな印象を受け入れ、活動の可能性あるいは自由意志に基づいてそれに答えていくうちに、幼児の心には、世界像や理想的な導きの線が生じるだろう。世界や自己の認識の仕方、思考や行動のスタイルは、互いに一種の円環的な作用を及ぼしあい、自己強化していく。だから、全体がいったん形成されると、変化しにくい構造になっている。

ただし〈幼児期にライフスタイルが決定する〉といっても、すべてが最終的に決まるわけではない。あくまでもライフスタイルの基礎が決まるのだ<sup>21)</sup>。アドラーは、子ども時代の形成期におけるライフスタイルを特に区別して〈原型 prototype〉という用語を用いていることがあるが、それは成熟したパーソナリティに対する〈初期のパーソナリティ<sup>22)</sup>〉、あるいは〈初期のライフスタイル<sup>23)</sup>〉ないし〈ライフスタイルの核<sup>24)</sup>〉を意味している。原型が形づくられる4歳か5歳の時期は、自分で選んだ目標を設定し、その目標の示す方向の線に沿って発達しようとする努力が開始される時期と重なっている<sup>25)</sup>。それは、先述した目的論と全体論の結合の具体的な表れである。「原型とライフスタイルの違いは、熟していない果実と熟した果実の違いのようなもの」であり、「ライフスタイルも、原型段階の方が、後のライフスタイルよりもずっとはっきりしていて、単純である<sup>26)</sup>」とされている。それというのも、ライフスタイルを

形成する4, 5歳のときには、子どもの経験はまだ乏しく、世界認識もごく限定されているので、直面する事柄をすべて単純化したり、一部を誇張したり、全体との関連を欠いたまま捉えようとするからであろう。

今まで述べたことと矛盾するようであるが、一度確立された初期のライフスタイルが、その後の人生であまり変化しないのも事実である。とくにライフスタイルの骨格をなす中心の枠組みは、それが発展するにしても、原型段階の単純な構造が維持され、後の複雑化したライフスタイルに受け継がれるであろう。なぜならライフスタイルは、孤立した経験から生まれるのではなく、その子どもが会う課題や困難の絶え間ない繰り返しから生まれるからである。

人間は自分のライフスタイルに基づいて〈何が正しく、何がまちがっているか〉〈何がうまくいき、何がうまくいかないか〉〈何がなされるべきで、何がなされるべきではないか〉を判断する<sup>27)</sup>。すなわちライフスタイルは人生の諸問題に直面したときにもつ一連の作業仮説、行動計画、あるいは青写真である。「ライフスタイルは、我々が自分自身を組織化し、新しい状況を評価し、人生を単純化し、予告したりすること、一般的には人生に対処することを可能にしてくれる<sup>28)</sup>」のだ。

我々は自分もつライフスタイル以外にはライフスタイルをもっていないので、もしライフスタイルが適切なものではなかったとしても、自分のまちがったライフスタイルにしがみついでしまう。我々は自分の考えや行動のあやまちに気がつきにくいし、たとえ誰かからあやまちを指摘されたとしても、その代わりにどうすればよいのか分からない。また従来のライフスタイルにとらわれずに新しいやり方を試みることは、その結果がどうなるかが予測できないだけに、勇気のいることである。むしろ多少の不都合が生じて、あるいは問題解決が完全にうまくいくわけではなくても、自分のライフスタイルをもち続けようとするだろう。ライフスタイルを変えることに抵抗を感じるのは、今までずっとそのスタイルでやってきたからである。馴染みのあるやり方の方が楽だから変えたくないのだ。だから多くの場合自分のライフスタイルを変えるのではなくて、自分の置かれた現実や状況の方を、ライフスタイルに合わせて変えようとする。だからライフスタイルに都合の悪い〈現実〉には、あえて目をつぶったり、気づかないようにしたりするのだ。他者や世界の理解、自分の感覚や感情の認知、あるいは行動の目標設定を、あやまったライフスタイルに適合させるために、(無意識的かもしれないが) あえて周りの状況について偏った見方やゆがんだ解釈を行い、自分の不適切な行動や考えを正当化する。たとえ誰の目にも失敗だと思えるような結果になっても、それを失敗だと認めないような〈私的な論理〉を展開することにもなるのだ。アドラーは次のように述べる。「大体において、ライフスタイルは変化しない。いつも同じパーソナリティをもった同じ人、同じ統一体だからである<sup>29)</sup>」と。また、「ひとたびライフスタイルが形成されると、それが矯正されることができるのは、個人が、遺伝と環境を用いる際に犯した自分の間違いを十分に自覚したときに限られる<sup>30)</sup>」と述べて、自分で自分のライフスタイルを変えることの難しさを指摘している。さらにドライカースは「4歳から6歳以降に基本的な性格を変えることは、サイコセラピーを通じた外からの援助なしにはほとんど不可能である<sup>31)</sup>」と述べている。

生まれたばかりの赤ちゃんは、小さくて弱くて頼りない。他人の注意や助けや世話がなけれ

ば生きていくことさえできない。無力であるがゆえに、人生の最初から〈所属と適応の問題<sup>32)</sup>〉に直面している。赤ちゃんが最初にふれるのは家族の人たちである。したがって赤ちゃんは〈どのように行動すればよいのか〉〈どうすれば家族に所属できるのか、家族の一員として承認してもらえるのか〉〈自分の居場所をどうやって見つければよいのか〉〈周りの世界にどう適応すればよいのか〉という問いに向き合うことになる。家族の人たちとの関係をなによりも大事に思うからである。この問いに対して、赤ちゃんは一人ひとり自分なりに答えを出し、家族への所属の仕方、適合の仕方を見つけないといけない。その答えがライフスタイルの基礎になるのだ。

家族の人は赤ちゃんに、意識的あるいは無意識的に〈どのようにふるまったらよいのか〉を教えるだろう。その教えが子どもを社会化する。親たちは、赤ちゃんが家族や社会の一員になりたがっていること、他者との関係を求めていることを、よくわかっている。他方赤ちゃんは、〈所属したい〉という生まれつきの強い潜在的欲求（共同体感覚のひとつの表れ）をもっていると同時に、自分の小ささ、弱さ、無力さをいやおうなしに感じて、それを克服したいと思うだろう。そして〈自分は劣っている〉という劣等性の意識（劣等感）のもち方が、子どもの発達を大きく左右する。なぜなら、劣等感の内容、劣等感の強さ、劣等感の補償の仕方などが、所属や適応の仕方、すなわちライフスタイルを決定するからである。では劣等感のもち方や補償の仕方（自分の劣等性を克服して、居場所を確保しようとする努力の方向や方法）は、どのようにして決まるのだろうか。ちなみに、この〈価値ある者になろう〉とする努力は、〈克服への努力〉〈完全への努力〉〈優越性の追求〉〈ちからを求める努力〉などと呼ばれている。

#### 4 ライフスタイルに作用する2つの力学

アドラー心理学では、〈あらゆる精神的な出来事に2つの本質的な力学あるいは要素が働いている〉と考える。それぞれお互いに異なる人間のパーソナリティも、その2つの力学に規定されている<sup>33)</sup>。ひとつは所属欲求を含む〈共同体感覚<sup>34)</sup>〉であり、もうひとつは〈優越性の追求〉である。アドラーによれば、この両者は根底に同じ核をもっており、人間性のなかの同じ原理に基づいている。すなわち、両者はともに〈自分の存在を認めて欲しい〉という根源的な欲望の表現なのである<sup>35)</sup>。社会的存在としての人間は、自分を認めてもらいたいがゆえに優れた者、価値ある者になろうとするし、他者と結びつき、他者と共感し、何かを共有し、協力しようとするのだ。

子どもがライフスタイルを形成するにあたって、この2つの力学が働いている。つまり〈家族や他の人と結びつき、一緒に協力していきたい〉という共同体感覚と、〈自分の弱さや頼りなさを克服して、より価値のある者になりたい〉という優越性の追求の2つの傾向が見られる。この2つの傾向が、子どもの思考・行動・感情のパターンに決定的な影響を及ぼす。両者の関係は、共同体感覚の大きさが、優越性を追求する際の目標を規定するような関係である<sup>36)</sup>。言い換えれば共同体感覚は、優越性の追求を〈人生の有用な面〉に方向づける認知的機能を果たしている。それゆえもし共同体感覚が欠けていたり不十分であったりすれば、優越性の追求は共同社会にとって好ましくない方向、無益な方向へ向かってしまう。例えば〈有能になろう〉



という優越性の追求は、〈自分は集団や人類の一員である〉という視点を失うと、単なる自己中心的な野心に変化するだろう。自分のことだけしか考えないので、自分が一番になること、自分が勝つことだけが目的になってしまう。共同体感覚は、優越性の追求に対して、他の人々との仲間意識を失わずに、社会生活のルールに従い、社会の福利に貢献するような方向づけを子どもに与えることができる。

しかしこの共同体感覚自体、子どもの成長と共に発達するということに注意しなければならない。共同体感覚が豊かに育つことではじめて、優越性の追求を正しい有益な方向に向けることができる。また〈一員でありたい〉〈居場所が欲しい〉という所属欲求も、共同体感覚の育ちが不十分であるときには、自分が所属する家族や特定の集団の利益だけを考えたり、社会の秩序やルールに反した不適切な行動をとったりするかもしれない。したがって共同体感覚は、教育によって意識的に発達させなければならない生得的な素質なのである<sup>37)</sup>。そのうえアドラーの〈共同体〉概念の射程は、家族や仲間を超えて、国家、人類、生物、無生物、宇宙へと無限に広がるので、共同体感覚の育成は、人類進化そのものの課題とも言えよう。

〈共同体感覚が発達するように〉、そしてそれによって〈社会全体に有益な方向で、優越性の追求がなされるように〉というのが、健全な正しい精神発達のあり方である。子どもはともすれば、自分の弱さや不完全さを克服することだけに気持ちを向けてしまい、個人的な優越性を追求しがちである。他人に対する関心をおろそかにしないで、共同体感覚を交えて優越性を追求するように導くことが、子どもの教育のもっとも重要な留意点であるだろう<sup>38)</sup>。共同体感覚と優越性の追求の両方が達成できるように、とくにライフスタイルの形成期においては、注意深い配慮が必要とされる。

〈自分は弱い、劣っている〉と感じる劣等感は、健康で正常な努力と成長への刺激ではあるけれども、子どもがもし無能感が強く、自信と勇気を失っているときには、不健全な劣等感に変質する可能性がある。そうなると子どもは困難を克服するのではなく、何かと口実を見つけては、困難から逃れようとするだろう。それでも〈優れた者でありたい〉という欲求を満たしたいときには、言い訳をしたり、虚勢を張ったりして、偽りの強さや成功を見せつけ、優れているふりをするかもしれない<sup>39)</sup>。それゆえ子どもが彼のライフスタイルに即して、現在の欠陥や劣等性を努力して克服することができるように、子どもを信頼して勇気づけることが重要だ。もし反対に叱ったり、罰を与えたり、笑い者にしたりして、絶えず子どもの勇気をくじいていると、〈自分には特別な保護が必要だ〉〈みんなの邪魔になる厄介者だ〉〈つまらない存在だ〉などと劣等コンプレックスをもたせる結果になり、成長への意欲を損なうだろう。

〈たとえ失敗しても、落胆することはない〉〈粘り強く練習し努力すれば必ず達成できる〉といった楽観主義を培うこと、勇気と自信をもち続けることこそ、子どもの成長には不可欠である。勇気、率直さ、信頼、勤勉などの性格特徴は、〈不必要に物怖じせず、自分のちからで課題を解決できると信じて勇敢に立ち向かうことのできる〉楽観主義的な人間に属するものである<sup>40)</sup>。アドラーは人間が諸困難に立ち向かうときの楽観主義的な態度を大いに評価するが、〈楽観主義の純粋なタイプは、最初の子どもの期を除けば稀である〉とも指摘している<sup>41)</sup>。大人は人生で多くの苦しみや悲しみ、自分の思い通りには行かない現実などを体験すると、臆病になっ

たり尻込みしたり絶望的になったりして、悲観主義的な態度と無縁ではいられない。だが、これから多くのことに積極的にチャレンジして自分の可能性を実現しようとする子どものライフスタイルは、自分の目標の実現に真直ぐに向かっていくことのできる楽観主義の方向に発達することが望ましいだろう。「教育が可能になるのは、子どもが希望と喜びに満ちて未来を見ているときだけ<sup>42)</sup>」だからである。アドラー心理学では、〈勇気づけ〉がしつけや教育のもっとも重要な方法であるとされているが、それは勇気と楽観主義とが深く結びついていることを意味する。また勇気は、共同体感覚と活動性（目標に向かう運動の割合）という2つの要素から成り立つとされているので<sup>43)</sup>、目標達成に向かって活動的であることと、他者に関心を持ち他者と協力する能力を高めることの両方を考慮して、勇気づけが行われなければならない。

なおアドラー心理学の文献ではあまり注目されることがないけれども、初期のライフスタイルを形成する4, 5歳になると、子どもは〈人間には男女という2つの性がある〉ということ、〈自分はそのうちのどちらかの性に属している〉ということがわかり、それを非常に気にするようになる。性役割意識の発達については、時代や文化の影響も少なくないが、幼児期はまだ家族環境のなかで〈所属と適応〉の方法を確立していく時期なので、男の子は父親を、女の子は母親を見本にして、男性性もしくは女性性の諸特徴を身につけていこう。現代の社会は、〈女らしさ〉あるいは〈男らしさ〉の差異を以前ほど強調する時代ではない。しかし家族は男女の性愛的な関係を軸にして成立しているため、子どもが両性について偏見や間違ったイメージをもたずに自分の性の役割を受け入れることは、それほど容易ではないように思われる。今日でも依然として〈父親の方が強く、権力をもつべきだ〉という男性優位の考え方が残っている。それは〈男性の役割がより重要である〉〈男性のほうが優れている〉といった信念につながりかねない。こうした男性優位の風潮は、必ずしも男の子の発達にとって好都合だとは言えないだろう。なぜなら男性による支配を維持するために、彼はまだ子どもであるうちから、自分の優越性を証明しなければならないからである。〈自分は男性だ。力が強く勇敢で、他者よりも優れていることを（多少無理をしてでも）示さなければならない〉とってしまう。男性優位の考え方から帰結するこの信念は、一種の義務を自分に課することになるのである。この義務感による優越性の追求を過剰に刺激して、気づかないうちに持続的な作用をおよぼす恐れがある。そうすると他者への関心や共感を育むどころではなく、ひたすら個人的・利己的な優越への努力に専念せざるをえなくなるだろう。

男性優位の関係は、女の子にとっても決して好ましいものではない。女性である自分が〈能力のない劣った存在〉であるかのように思い込んでしまい、一種の諦めの気持ちから従順な姿勢を身につけ、従属的な役割で満足するようになるかもしれない。逆に、屈従には耐えがたいとの思いから、女性的な役割をすべて嫌悪して、強くて活動的な男性的理想像を自分も追求しようとする女性がいるかもしれない。いずれの場合も〈優秀な男性〉対〈劣等な女性〉という対立的・競争的な両性の関係が、女性の自然な生き方を著しく難しくしているのだ。

子ども期は、劣等感をバネにして、あるいは〈できるようになりたい〉〈上手になりたい〉という優越性の目標を目指して努力する時期である。優越であろうとする努力は、成長にとって欠かすことのできない推進力であり、さまざまな分野で、さまざまな能力の発展を促す。しか

しそこに男女の対立的な関係が絡んでくると、競争心が過剰に刺激されたり、他者を支配したいために自分より弱いパートナーを探したりすることにもなりかねない。最初から優越への努力を放棄する子ども、みずからの可能性を閉ざしてしまう子どももいるかもしれない。それゆえ家族のなかに父親と母親の民主的な関係が築かれ、〈男性も女性も平等であり、人間として同じ価値がある〉ということが実感的に理解されることが重要である。

## 5 父親と母親の関係

ところで4, 5歳までの子どもの性愛的な対人関係は、自他が未文化な関係である。目の前にいる相手の人は、まだはっきりと〈自分と異なる個体〉としては意識されていない。模倣、声と声のやりとり、抱っこなど、乳児期からさかんに見られる他者との相互的な関わりは、個と個の関係というよりは、他者や状況が渾然一体となった融合的な関係のなかで行われている。現前している母親（あるいは父親やきょうだい）も自分も、状況全体から分離することなく、融合している。しかし4, 5歳になると自他の分離が次第に進み、目の前にいる母親は、自分とは異なる個体として意識されるようになる。また自分と母親との関係そのものについても意識して、自分と母親の関係がどのようなものであるかについて、ある程度客観的に理解できるようになる<sup>44)</sup>。それだけ子どもは、状況から自分を分離し、状況から距離をとることができるようになったと言えよう。それは自分を対象として眺めることであり、自意識が生まれることである。また自分が含まれない対関係、例えば母親と父親、母親ときょうだい（兄や姉など）などの関係のあり方も理解できてくることである。母親には自分以外にも父親やきょうだいとも親密な関係があるということ、その関係のあり方は母親と自分の関係のあり方とは異なるものだということが理解できる。こうして子どもは家族布置の中で自分の位置や役割を考えるようになるだろう。この時点で、アドラーも強調するように、子どもを母親との2人だけの性愛関係に囲い込まずに、そこに父親やきょうだいを加えること、さらに他の子ども仲間との交友を深めるように導くことは、母親の重要な役割である<sup>45)</sup>。

〈父親—母親〉という関係から自分を見ることは、子どもが自分を相対化する視点であり、自分が父親と母親の2人の関係からどのように見られているのか、どう評価されているのか、という自己対象化のまなざしである。そこに他者から見たときの自分のイメージが生まれる。この〈他者から見られる自分〉という意識は、多様な感情、例えば羞恥心、疎外感（仲間はずれ）、羨望、嫉妬、ライバル意識や競争心、虚栄心、すねる、おもねる、卑屈になるなどの複雑な感情の発達を促すだろう。

そこで父親と母親の関係のあり方は、子どもと他者との関係のあり方、および子どものライフスタイルの形成に、極めて重要な意味をもつと言える。性役割モデルとしての父親像、母親像に加えて、両者の関係が大きく影響するのだ。すなわち、もし父親と母親が〈支配—服従〉の関係にあるときには、子どもはみずからの優越性を追求するにあたり、父親であれ母親であれ、自分の環境のなかで一番強い人として支配する方の親を真似し、目標とするだろう<sup>46)</sup>。劣等性を補償しようと努力する子どもは、よく分からないままに手探りや推測によって、強い方の親の支配的・命令的な態度を目標とするのである。つまり子どもには、性役割の目標とは異

なる、支配力を基準にした別の目標が提示されているのだ。他者を支配することを目標にするライフスタイルは、精神の正常性のバロメーターとされる共同体感覚の発達を阻害してしまうにちがいない。他者に関心を持ち、他者と何かを共有し、協同するために必要な共同体感覚は、父親と母親が平等で民主的な関係にあるときにこそ、発達することができる。両親の関係は、それゆえ子どもの優越性の追求と共同体感覚のどちらもが発達するうえで、鍵をにぎっているのだ。

## おわりに

子どもの健全なライフスタイルを形成するためには、父親と母親の関係のあり方、および家族内の平等な関係、相互尊敬の関係が重要である。だがそれに加えて、もうひとつ不可欠な要件があることを指摘しておきたい。それは子ども同士の交友である。仲間との遊び、仲間と協力して行う活動は、他人の気持ちや感情を理解するちからを伸ばし、協同の仕方を身につけ、仲間社会のなかでの自分の役割や位置を学ぶ貴重な機会である。遊びを通じて、仲間集団のなかで鍛えられて育つことの意義は、ずっと以前から経験的に認識されてきた。遊び集団のなかでの活動を通して、家族の人間関係とはまた異なった関係を築くことができるものである。お互いがまだ幼く、同じような課題に取り組んでいる者同士であることの意味は大きい。ちからの差もあまりなく、それだけにお互いに自分のちからを発揮する機会があり、対等な関係を築きやすい。同年齢の仲間との関係では、確かにけんかや争いごとが絶えないけれども、お互いの主張や利害を調整するちからを培うことも大事である。仲間の存在、仲間の頑張っている様子、仲間の成功や失敗が、自分を励まし勇気づけてくれる。共同体感覚が育つためには、家庭と並んで仲間社会の存在を欠かすことはできない。

ところがこうした仲間との直接的な交友が、少子化社会、情報社会の今日ではますます困難になっている。子どもが自然に集まれる場所も時間もない。パーソナリティの健全な発達のために、とくにライフスタイルの形成される幼児期において、子ども同士の交わりを保障し、より豊かにするための積極的な方策が、家庭や地域や教育施設などの緊急かつ重要な課題として浮上しているように思われる。

## 注

- 1) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, ed. by H. L. Ansbacher and R. R. Ansbacher, New York, Harper & Row, 1964, p. 163.
- 2) Ibid., p. 177.
- 3) A. Adler, *The Science of Living*, ed. by H. L. Ansbacher, New York, Doubleday & Company, 1969, p. 4. (岸見一郎訳『個人心理学講義』、一光社、1997年、20頁)
- 4) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, pp. 205–206.
- 5) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, p. 177.
- 6) A. Adler, *The Science of Living*, p. 1. (邦訳、13頁)
- 7) R. Dreikurs, *An Introduction to Individual Psychology*, London, Routledge, 1999, p. 17. (野田俊作監訳『アドラー心理学の基礎』、一光社、1998年、35頁)
- 8) A. Adler, *The Education of Children*, trans. by Eleanore and Friedrich Jensen, Indiana, Gateway,

- Gateway, 1978, p. 7. (岸見一郎訳『子どもの教育』、一光社、1998年、10頁)
- 9) Cf. R. Dreikurs, op. cit., p. 72. (邦訳、98頁), and R. Dreikurs, *The Adlerian Approach to Psychodynamics*, in *Contemporary Psychotherapies*, ed. by M. I. Stein, New York, The Free Press of Glencoe, 1961, p. 62.
  - 10) A. Adler, *Menschenkenntnis*, Frankfurt a. M., Fischer, 1999, SS. 81–82, 89. (高尾利数訳『人間知の心理学』、春秋社、1997年、92, 103頁)
  - 11) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, p. 175.
  - 12) R. Dreikurs, *The Adlerian Approach to Psychodynamics*, p. 63.
  - 13) Ibid. p. 63.
  - 14) A. Adler, op. cit., p. 177.
  - 15) G. J. Manaster and R. J. Corsini, *Individual psychology: Theory and Practice*, F. E. Peacock Publishers, 1982, p. 12. (高尾利数・前田憲一訳『現代アドラー心理学』、春秋社、1999年、上、38頁)
  - 16) R. Dreikurs, *An Introduction to Individual Psychology*, p. 72. (邦訳、98頁)
  - 17) R. Dreikurs, *The Adlerian Approach to Psychodynamics*, p. 67.
  - 18) A. Adler, *What life could mean to you*, trans. by C. Brett, Minnesota, Hazelden, 1998, p. 28. (高尾利数訳『人生の意味の心理学』、春秋社、1997年、34–35頁)
  - 19) A. Adler, *The Education of Children*, p. 29. (邦訳、34頁)
  - 20) A. Adler, *The Science of Living*, p. 38, 40. (邦訳、83, 87頁)
  - 21) A. Adler, *Problems of Neurosis*, ed. by P. Mairet, New York, Harper and Row, 1964, p. 31, 68. (岸見一郎訳『人はなぜ神経症になるのか』、春秋社、2001年、44, 86頁) and A. Adler, *Menschenkenntnis*, SS. 21–22. (邦訳、6頁)
  - 22) A. Adler, *The Science of Living*, p. 4. (邦訳、20頁)
  - 23) Ibid., p. 43. (邦訳、91頁)
  - 24) Ibid., p. 48. (邦訳、100頁)
  - 25) Ibid., p. 3. (邦訳、15頁)
  - 26) Ibid., p. 63. (邦訳、129頁)
  - 27) G. J. Manaster and R. J. Corsini, op. cit., p. 97. (邦訳、204頁)
  - 28) Ibid., p. 98. (邦訳、205頁)
  - 29) A. Adler, *The Science of Living*, p. 48. (邦訳、100頁)
  - 30) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, p. 454.
  - 31) R. Dreikurs, *An Introduction to Individual Psychology*, p. 56. (邦訳、80頁)
  - 32) G. J. Manaster and R. J. Corsini, op. cit., p. 80. (邦訳、171頁)
  - 33) A. Adler, *Menschenkenntnis*, S. 169. (邦訳、216頁)
  - 34) 本論ではアドラー心理学で用いられる〈共同体感覚 Gemeinschaftsgefühl〉という用語については、詳しく論じないことにしたい。B. H. シャルマンは講演の中で、共同体感覚を専門用語として用いるように述べたあと、英語では〈social interest〉と訳されているが、〈a sense of being a part of the group〉もしくは〈a sense of togetherness〉と訳したほうがよいと提案している。「一緒にいるという感覚」という表現は理解しやすいように思われる。B. H. シャルマン講演録「アドラー心理学の基礎」(日本アドラー心理学会『アドレリアン』第15巻第1号、2001年、所収)を参照。
  - 35) A. Adler, *The Education of Children*, pp. 115–116. (邦訳、110頁)
  - 36) A. Adler, *Menschenkenntnis*, S. 73. (邦訳、83頁)
  - 37) A. Adler, *Problems of Neurosis*, p. 31. (邦訳、43頁), G. J. Manaster and R. J. Corsini, op. cit., p. 44. (邦訳、102頁)
  - 38) A. Adler, *The Science of Living*, p. 31. (邦訳、68頁)
  - 39) Ibid.
  - 40) A. Adler, *Menschenkenntnis*, S. 36. (邦訳、27頁), A. Adler, *The Education of Children*, p. 81. (邦訳、80頁)

- 41) Ibid., S. 157. (邦訳、200頁)
- 42) A. Adler, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, p. 400.
- 43) Ibid., pp. 166, 341.
- 44) 幼児期における性愛的な関係そのものの意識化については、小浜逸郎『方法としての子ども』、大和書房、1987年、第4章を参照した。
- 45) A. Adler, *Problems of Neurosis*, pp. 21, 32. (邦訳、30, 44頁)
- 46) A. Adler, *The Science of Living*, p. 3. (邦訳、16頁)

(原稿受理 2007年3月15日)